お客様事例

業界内での競争力強化に向け、ハードウェアコストの削減、障害発生件数の低減と、開発生産性の向上を目指し、基幹系システムを国産メインフレームからz Systemsを中心とした構成に刷新。

株式会社かんぽ生命保険（以下、かんぽ生命）は、民営化以降継続してきたITシステム見直しの取り組みの一環として、2010年より次期基幹系システム更改プロジェクトを推進。インフラにはIBMが提供するメインフレームであるIBM z Systems（以下、z Systems）を採用しました。従来は東日本と西日本の2カ所で運用されていた基幹系システムを東日本に集約し、西日本に災害対策用の待機系システムを設置することでハードウェア・コストを大幅に削減するとともに、安定したシステム稼働環境を実現しています。

［導入製品］ IBM z Systems、IBM DS8000シリーズ、IBM TS7700シリーズ

課題
- 業界内での競争力強化に向けた、ハードウェアコストの削減、障害発生件数の低減と開発生産性の向上

ソリューション
- 国産メインフレームをIBM z Systemsを中心とした構成へ刷新

効果
- ハードウェアコストの約4割削減
- 安心安全に稼働するシステムの構築と障害発生の抑止
- 外部仕様書の定義やユーザー部門と開発部門の役割明確化による開発生産性の向上

[お客様の課題]

生命保険会社としての信頼性と競争力を確保するために基幹系システム更改プロジェクトを推進

2007年、日本郵政公社の民営化により、郵便局を通じた簡易生命保険の提供を受け継ぐかんぽ生命が誕生しました。簡易生命保険は1916年に「簡易な手続きで、国民の基礎的生活手段を保障する」という社会的理念を持って誕生。かんぽ生命はその社会的使命を受け継ぎながら、「最も身近で最も信頼される保険会社」を経営理念として掲げビジネスを行っています。

そのような背景の中、かんぽ生命は民営化直後から、システム更改に着手してきました。株式会社かんぽ生命保険 システム企画部 企画役 兼 かんぽシステム ソリューションズ株式会社 常務執行役員 酒井 則行 氏は、かんぽ生命におけるシステムの重要性について次のように話します。

「かんぽ生命は約20,000カ所の郵便局で業務を行っており、ビジネスの基盤となるシステムも大規模で、日本の保険業界で重要な社会インフラを担っているという使命感があります」(酒井氏)

また、当時のシステムは、「他の大手保険会社と比較して、システムコストの高止まりや、障害発生件数の多さなどの課題があり、迅速な対応が求められていました」と酒井氏は語ります。

ITシステムを品質面とコスト面の双方において、業界内でも高水準のレベルに向上させ、競争力と信頼性を強化させるために、改革を進めていました。

かんぽ生命のシステムは、郵便局や支店で受け付けた申込や請求を処理するオープン系システムと、処理結果などのデータを管理、蓄積する基幹系システムに大きく分かれます。2007年から始まったシステム全体の更改プロジェクトの中では、まずオープン系システムの刷新に取り掛かるとともに、2008年から基幹系システム更改の計画を開始し、その目的として、「ハードウェアコストの4割削減」、「障害発生件数の低減」、「開発生産性の向上」の3つに定めました。これらの目的を具体化するための基本構想がまとめられ、経営会議での承認を経て、2010年には「次期基幹系システム更改プロジェクト」が発足します。

「2015年に株式市場への上場を予定していたことも、大きな転換期であり、かんぽ生命が世の中に与える影響がより大きくなったと感じています」(酒井氏)

[ソリューション]

z Systemsの並列シスプレックスとキャパシティー・バックアップ機能を活用することで低コストでの災害対策を実現

かんぽ生命の基幹システムを任せられるプラットフォームの基準とはなにか、要件定義フェーズで議論した結果を仕様としてまとめ、その後入札を実施しました。仕様の項目は、保険会社での導入実績や、大規模プロジェクトを推進する能力、長期の保守能力など多岐に渡ります。ハードウェアだけではなく、ミドルウェアやストレージの災害対策など様々な面から評価した結果、機能やコストなどの要件を満たしていた日本IBMの基盤が採用となりました。基盤は、z Systems、IBM DS8000シリーズ、IBM TS7700シリーズ、IBM DB2、IBM Information Management System、IBM CICS、IBM WebSphere MQ、IBM TivoliなどのIBM製品で構成されています。その後、アプリケーション領域の競合入札が実施され、結果的にアプリケーション領域も日本IBMの採用に至りました。

「アプリケーション領域において、要件定義結果に基づき作成された仕様書に対して、日本IBMの提案はプロジェクトを前半と後半に分けることで、サービスインの遅延リスクを低減するという、要件以上の内容が盛り込まれていました」と酒井氏は評価します。

次期基幹系システムの更改プロジェクトは、「現行システムのプログラミング言語切替とプラットフォーム変換」、「開発生産性や品質 向上のためのアプリケーション構造の見直し施策実施」

複数社で運用していた基幹系システムをIBMでの運用に統一することで、災害対策の強化とコスト削減を実現することができました

株式会社かんぽ生命保険
システム企画部 企画役 兼 かんぽシステム
ソリューションズ株式会社
常務執行役員
酒井 則行 氏

で構成されており、要件定義フェーズ の時点ではこれらを同時に実施する計画でした。しかし、日本IBMの提案では、9カ月をかけて現行の可視化と言語変換準備を行います。その後、前半にコンバージョンツールを開発してプログラミング言語切替を徹底的に機械化して実施し、後半で人手が必要となるアプリケーション構造見直し施策を行うことで、問題が発生した場合の切り分けや対応の複雑化を回避する計画です。「アプリケーション構造の見直しを行いながら言語切替をする当初のプランでは、言語切替も手作業が多くなってしまい、人為的ミスが増えるのではないかという不安がありました。前半と後半に分けたことで、工程ごとに計画を見直すこともでき、安全で柔軟性の高いプロジェクト運営ができました」と酒井氏は言います。

プロジェクトではまず、要件定義の具体性や網羅性を高めるために、現行システムの「外部仕様書」を作成し、システムの可視化 に取り組みました。併せて、共通認識に基づいて業務要件定義を行うために、「事務仕様書」や「ユーザーインタフェース仕様書」を作成しました。これにより、基幹系システム更改後には、制度改正によるシステム開発や変更に対して、各種仕様書を用いることで、共通の認識に基づいて業務要件定義や設計ができるようになり、開発生産性の向上を図れます。

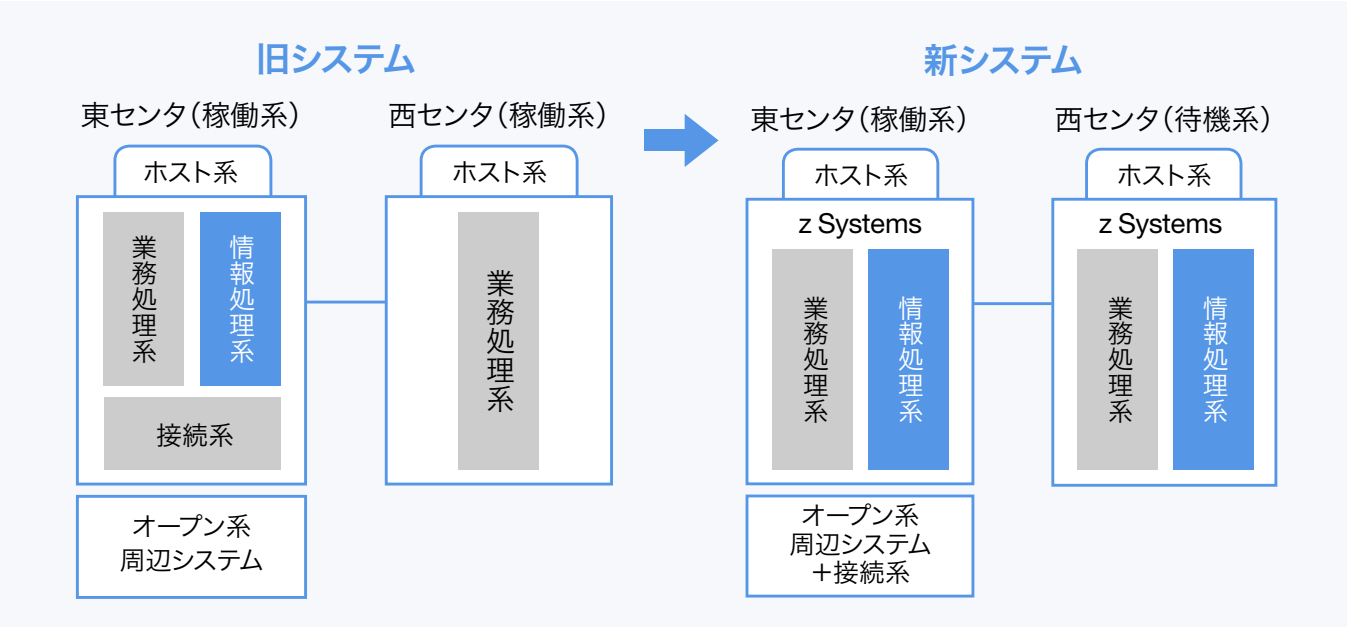
国産メインフレームからz Systemsへの移行にあたっては、これまで業務処理系と情報処理系に分かれ、複数社で運用していた基幹系システムをIBMでの運用に統一することで、災害対策の強化とコスト削減を実現することができました。従来の基幹系システムは、東日本情報管理センターと西日本情報管理センターの2カ所両方が稼働系システムとして運用されていましたが、更改後は東日本に稼働系を集約。西日本は災害対策用の待機系と位置づけました。稼働系と待機系のメインフレームは並列シスプレックスと呼ばれるクラスタリング・システムにより高度な可用性が確保されます。「災害対策用の待機系メインフレームは、被災時にCPUを増やして業務処理を継続するキャパシティー・バックアップ機能があります。通常時はバックアップに必要な最低限のリソースのみを使うため、通常時の課金を低く抑えることができます。この機能がハードウェアコストの削減に寄与しています」(酒井氏)

また、基盤システム運用が1社に統合されたことでも、保守運用コストの削減効果が生まれています。

かんぽシステムソリューションズ株式会社 基盤システム部長 佐藤 昭司氏は、プロジェクト期間中からz Systemsの性能を高く評価していました。「実績のあるシステムで安心感がありました。テスト中も、実際に使ってみてから分かる予想外な限界値などがなく、当初の想定を超える性能が実現できました」(佐藤氏)

実績のあるシステムで安心感がありました。予想外な限界値などがなく、想定を超える性能が実現できました

かんぽシステムソリューションズ株式会社
基盤システム部長
佐藤 昭司 氏



システムの基盤が整い、今後はz Systems上にある膨大なデータをもとにIBM Watsonを活用した攻めのシステム構築を検討しています

[効果 / 将来の展望]

ハードウェア・コストの削減など、プロジェクトの目的を達成できる見通しに

2017年1月に新システムのサービスインを迎えてから今日まで、障害は発生しておらず順調に稼働しています。

プロジェクトの効果目標であった「ハードウェアコストの約4割削減」、「障害発生件数の低減」、「開発生産性の向上」の3つについて、酒井氏は次のように話します。「ハードウェアコストは2009年と比較して約4割の削減を実現できており、サービスイン後、更改したシステムは安定して稼働しています。開発生産性の向上は、長期に渡って成果を確認していかなければならないものの、各種仕様書の定義や、ユーザー部門と開発部門の役割分担を行ったことで、成果が見込めることは検証できています」(酒井氏)

z Systemsに対しては、システムを支える基盤としての信頼性を高く評価しています。

「z Systemsにしたことで、ハードウェアに起因する障害発生リスクが減り、信頼できるシステムだと実感しています。保守体制としても、センターで自動運用監視がされ、異常値はいち早く察知して予防処置を施せています」(佐藤氏)

「大規模かつ複雑なシステム更改にも関わらず、大きな問題もなく旧システムからスムーズに移行できた要因として、z Systemsのハードウェアとしての安定感や安心感が大きかったと思います」(酒井氏)

また、情報処理のスピードが上がったことで、バッチ処理の時間が短縮されただけではなく、これまで1時間以上かかっていたデータ検索や分析が、数分で終わるようになったなど、ユーザー部門からも喜びの声があがっています。

民間保険会社として勝負していくためのシステム的な土台が整った今、かんぽ生命ではIBM Watsonを使った攻めの経営を検討しています。

「高度な支払査定やコールセンター業務で、IBM Watsonの活用を考えています。z Systems上で蓄積、管理されている膨大なデータを取り込み、その結果をもとにWatsonがアドバイスをすることで、より正確な査定や、コールセンターの業務効率化を図れないか検討しているところです」(酒井氏)

2018年度から始まる次期中期経営計画に向けて、z SystemsやIBM Watsonのさらなる活用が期待されます。

かんぽ生命　かんぽシステムソリューションズ

株式会社かんぽ生命保険

〒100-8798 東京都千代田区霞が関一丁目3番2号
http://www.jp-life.japanpost.jp/

株式会社かんぽ生命保険は、郵政民営化に伴い2006年に設立(当時、株式会社かんぽ)。「いつでもそばにいる。どこにいても支える。すべての人生を、守り続けたい。」を経営理念として掲げ、郵便局ネットワークを中心として地域社会に貢献しています。

©Copyright IBM Japan, Ltd. 2017
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21
このカタログの情報は2017年4月現在のものです。仕様は予告なく変更される場合があります。記載の事例は特定のお客様に関するものであり、全ての場合において同等の効果が得られることを意味するものではありません。効果はお客様の環境その他の要因によって異なります。製品、サービスなどの詳細については、弊社もしくはビジネス・パートナーの営業担当員にご相談ください。 IBM、IBMロゴ、ibm.com, IBM z Systems, IBM DS8000, IBM DB2, IBM CICS, IBM Tivoli は、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corp.の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。現時点でのIBM商標リストについてはwww.ibm.com/legal/copytrade.shtmlをご覧ください。